

大人の心房中隔欠損症に対するカテーテル治療 より安全に、より確実に

岡山大学病院 循環器疾患治療部 准教授 赤木禎治

概要

国内でカテーテルを使った心房中隔欠損症の治療が行われるようになって、約2年が経過した。平成18年4月からは保険診療も可能となった。岡山大学病院での治療経験は現在130例を越え、国内ではもっとも症例数の多い施設となっている。資料1に示すように治療成功率も93%を越えているが、もっとも大きなメリットは負担が少ないこと。さらに心臓への負担が少ないために術後の回復がとても早いことである。

当初、心房中隔欠損症は先天性心臓病であるため「こどもの病気」、そしてカテーテル治療も「こどもに対する治療」と考えられていた。ところが実際には40歳以上の中高年の患者さんも全体の半数近くを占め、胸を切らずに治療を受けたいという要望が非常に強いことが明らかになった。特に高齢者では手術による痛みがなく、長期のリハビリも必要としないカテーテル治療のメリットは非常に大きいことが明らかになってきた。さらにこれまでの経験から大人の心房中隔欠損症であっても、小児と同様に心機能が改善することがわかってきた。

本年12月8日には日本心血管インターベンション学会・非冠動脈疾患侵襲治療委員会の高山守正医師（榊原記念病院 循環器内科）と赤木禎治が発起人となって、「第1回成人 ASD/PFO カテーテル治療研究会」を東京で開催し、全国より200名におよぶ循環器専門医の参加を得た（資料2）。

今後、成人の心房中隔欠損症のカテーテル治療において、国内の指導的施設として治療技術を向上させていきたいと考えている。

疾患の解説

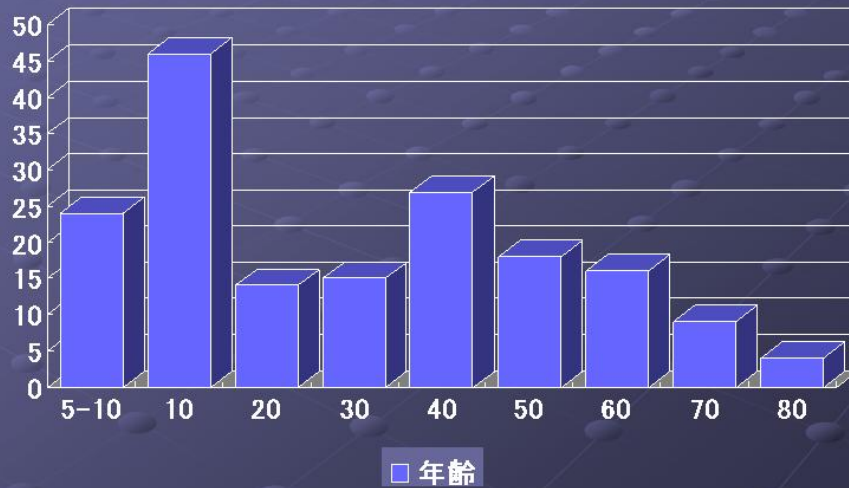
心房中隔欠損症は、これまで手術により開胸して欠損孔を閉じるしか治療法が無かったが、カテーテルで短時間にかつ安全に治療できる時代になってきた。ただし、治療技術に関してはまだ発展途上段階で、国内でも治療実施可能な施設は10数施設しかない。しかも多くは小児科、もしくはこども病院である。

心房中隔欠損症はもちろん先天性の病気ですが、小児期から心臓に穴のあいた状態が続いている。しかし若いうちは症状が比較的軽く、未治療でも大人までほとんど無症状で成長することができる。このため大人になって初めて心房中隔欠損症と診断のつく患者さんは決して少なくない。これまでの報告では、大人で診断される先天性心臓病の約50%は心房中隔欠損症である。今の子どもは乳児検診、小学校や中学生での心臓検診で発見され、無症状でも子供のうちに治療される。これは大人になってからの治療（手術）では不整脈や心不全などの改善が思わしくない事がわかっているからである。

無症状のまま大人になっても30~40歳代を過ぎると症状が徐々に進行し、しだいに不整脈や心不全へと進行し死亡に至る。さらに欠損孔が小さくても脳梗塞の原因となることがあり、脳梗塞の再発を防ぐための新しい治療法としても注目されつつある。

年齢分布

平均 30.4 ± 24.2 歳



心房中隔欠損症のカテーテル治療

